

洛書

砂漠に吹く風を越えて

高田 明



「砂漠に吹く風」は、私が学生の時に好きだった漫画のタイトルから借用したフレーズである。カラハリ砂漠に来て、舞い上がる砂と熱い風にさらされるたびに思い出す。多くの生き物に過酷な暮らしを強いる環境だが、それを肌身に感じられることはフィールドワークの醍醐味の一つでもある。

私が所属するアジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)は、長期間のフィールドワークを看板とする、5年一貫制の大学院である。この課程では、院生は少なくとも1~2年間はアジアやアフリカの調査地に赴いて、フィールドワークを行うことが求められる。常時100名を超える院生を対象とした教育・研究活動を可能にするために、ASAFASは1998年の発足以来、有形無形の努力を絶え間なく行ってきた。教育を主たる目的として院生のフィールドワークをこれほど手厚く支援する大学院は、世界にも他にほとんど例を見ないのではないか。

ただしASAFASの教員は、院生の研究内容まで手取り足取り教えることはない。というより、できないのだ(と思う)。アジアとアフリカはなんといっても広い。調査地となるのは砂漠や熱帯雨林に設けられたキャンプ、奥深い農村、混沌とした都市などさまざまである。調査のトピックも動植物の生態から市井の人々の暮らし、国家の規模を越える政治問題まで多岐にわたる。はじめは教員の陰でおっかなびっくりしていた院生も、早晚その調査地や調査トピックについて教員よりも詳しくなっていく。その過程では、自分の調査にあったフィールドワークを自らデザインしていくことが求められる。いうまでもない、自学自習の精神だ。どの分野の研究にも必要な精神だと思うが、生身の人の生活を扱う研究ではとりわけ重要になる。こうした研究では想定外の小さな、そして時には大きなトラブルがつきものだからだ。想定できることばかり起こるのであれば、

そこで生きたコミュニケーションが起きているのかどうか、疑ってかかる方がいい。これから研究を始める院生に教えられることがあるとすれば、小さなズレや脱線をおもしろがり、自分のデザインに取り入れていくメンタリティを身につけることは、その最上位にくるだろう。

私自身はASAFASの前身が人間・環境学研究科にあった時代に大学院に入り、1990年代の後半から南部アフリカのカラハリ砂漠やその周辺部に住むサン(San)のもとで、人類学的な調査を行ってきた。まだ道半ばで、満足できるような成果もあげてはいないが、個性豊かな諸先輩の背中を見て学んできたことを次の世代に伝えていく必要性も感じるようになってきた。

しかしながら今の時代、このようなスタイルの研究には向かい風が吹いている。キャリア・パスは私が院生をしていた頃よりも細かく、明確に区切られるようになった。それと照らし合わせつつ、論文を掲載する雑誌のグレードと採択された論文の数を掛け合わせるような形でのアウトプットが求められる。しかも、要求水準はどんどん上がっている。こうした状況で、多くの研究者、とくに若手の研究者は、潤沢な研究資金の獲得というよりはむしろ、研究者として生き残っていくためにその活動のコストパフォーマンスの高さを意識せざるを得なくなっている。

もっとも、アフリカの涼しい夜、日々満ち欠けする月に見入っていると、そうした悩みはいつの間にか雲散霧消している。どんな時代にも制約はあるものだ。不満をいうだけではいい仕事は生まれまい。社会と個の間で煩悶しながら自然に向き合い、いったん動き始めたら、強い意志の力で困難を乗り越えながら進んで行かなくてはならない(ルソーの『告白』、カエサルの『ガリア戦記』は、これらについての逸出したフィールドノートでもある)。

カラハリ砂漠では、砂嵐が吹き荒れた後、短い雨季が始まる。この雨は、この地に生きるもの皆に、実りの季節をもたらす。

(たかだ あきら アジア・アフリカ地域研究研究科准教授 専門は人類学)